特集「近代日中関係史の中のアジア主義－東亜同文書院と東亜同文会－」
【論文】

# 宮崎滔天と孫文（訳注１）の広州非常政府（訳注２）における対日外交
## ―何天炯より宮崎滔天への書簡を中心に―

中国社会科学院近代史研究所　李 長莉
（佃隆一郎訳）

孫文の日本での友人であった宮崎滔天（とうてん）（1871-1922 年）は、清朝の帝制を覆し共和制を打ち立てた辛亥革命を指導した孫を全力で支援したのであり、その事跡は歴史の記録に著わされていて、日中両国ですでに広く知られている。しかし辛亥革命ののち、とりわけ孫文が中国国内で軍閥の統治に反対する革命を継続・進行させていた時期に、宮崎滔天と孫文の革命運動との関係はどのようであったかということについては、歴史的な記述はかえって少ないのであるが、その大きな原因の一つに、記載されている史料が少ないということがあり、一般人にとってはその史実を理解しようがないところである。このため、孫文が帰国して革命にあたっていた時期に、宮崎滔天と孫文の活動との関係はどうであったかや、空白期間のもとで宮崎滔天は、孫文の革命とは疎遠になったのか否かについては、歴史書での記述はきわめて少ない。例えば、1920〔大正９〕年 11 月から 1922 年６月にかけて、孫文が広州で中華民国非常樹立を指導していた時期、孫文の革命運動は後期での一つの高潮に達していたのであるが、宮崎滔天も生涯の最後の段階を迎えていたのであり、この時期の宮崎滔天と孫文の革命運動とはなおも結びついていたのか否か、宮崎はなおも動いていたのか、何か役割を果たしたのか、これらの点については、いっそう歴史の記述には見出しがたい。ならばこの問題は、宮崎滔天と孫文の革命との関係や、宮崎の「連華興亜」思想に中国での革命活動の進展と帰着への参画、それに孫文の革命と日本との関係についてという各点を理解することにこそ、いずれも価値があるのであって、それゆえに探究に値するのである。

筆者は近年、宮崎滔天の子孫および、孫文の秘書であった何天炯（かでんけい）の子孫が収蔵していた、何が宮崎に送った郵便書簡の一群[1]を収集した。それは主に 1914〔大正３〕年から 1922 年にかけて、中国国内で何天炯が宮崎滔天に書き送ったもの[2]であって、何の筆により、宮崎がこの時期に孫文の革命に関係していたことの一端が映し出されている。本稿はこれらの資料を主要な依拠とし、加えてその他の資料を参照して補完したものであって、同時期の宮崎滔天と孫文政権との対日外交面での関係を解きほぐすことで、上述した各問題への解答となりうることを期するところである。

（訳注１）原文では一貫して「孫中山」とあざ名で表記されているが、日本での慣用上「孫文」と本名で訳すことにした（ほかの人物にも適用）。文中での訳者の注記は〔〕内で示す。また、中国語の書名・論文名は訳さずに、固有名詞ともども簡体字を日本の常用漢字に置き換えた形で表記する。
（訳注２）孫文が北方の段祺瑞政権に対抗して、1917 年９月に広東省広州に樹立した政権の正式名称は、中華民国軍政府である。したがってこれは広州（広東）軍政府といわれる。この政権は 1912 年３月に定め

られた臨時約法護持を主張し、護法運動を行った。孫文は、その後、1918 年 5 月、広西軍閥陸栄廷により広州軍政府から追放された。1920 年 10 月、陳炯明が広東軍を率いて陸栄廷軍を駆逐し広州に入り、その後孫文も広州に入った。後に 1921 年 5 月、孫文は国会非常会議により大総統に選出されたため、「非常大総統」と呼ばれた。それ故筆者はこの時期の広州軍政府を、「広州非常政府」と呼んでいると思われる。

## 一、宮崎滔天と何天炯

何天炯（1877-1925）は、広東省興寧の出身であり、1903〔明治 36〕年に日本に留学に来た時に、黄興・宋教仁らと知り合ったことで、革命運動に参加し、日本に留学していた中国人学生の革命運動を支援していた宮崎滔天とも知り合いになった。1905 年滔天らの人的な取り持ちのもとで、孫文・黄興が東京で結成した中国同盟会に、何天炯は真っ先に加入して、創立時の会員の一人となり、会計と広東支部での役職をになった。1907 年に孫文・黄興は相次いで日本を離れ南下して武装蜂起を策動し、何天炯は東京本部の留守役となり、宮崎滔天と共同で借款や武器弾薬を購入し輸送する計画や、蜂起の人員の転送や後詰めなどにあたった(3)。何天炯と宮崎滔天は意気投合し、「先生」「友人」「兄貴」として互いをもてなし、深厚な友誼を結んだ。第二革命に失敗した孫文・何天炯らが再度日本に亡命していた間には、何天炯は宮崎家に長期間滞在したこともあった。孫文と黄興との間で、中華革命党の成立〔1914 年東京で〕にあたって党内分裂が起こった際には、二人は孫・黄の古くからの友人と同志として、行き来して調停につとめ、孫文のやり方に不満を抱いていた人たちをとりなした(4)。これによって二人は確かな同志となり、思想的な接近もあったものの、感情こそが親密な知己として交流するようになった。1915〔大正４〕年よりのち、何天炯は中国国内に戻って活動したが、1922 年に滔天が世を去る前日の夕方まで、両者は一貫して通信や連絡を保ちつづけた。宮崎家に現存する中国友人との書簡のなかでは、何天炯からのものが最も多く、100 点余りに達しているのであり、二人の関係の密接さがわかる。何天炯のこれら書簡のなかでは、いくたの個人および革命党の情況が述べられていて、中国革命に関心を寄せつづけた滔天の情況や、一方で滔天に助言や相談、ならびに援助を求めていたことがわかるのである。その中にはほかの資料には記されていない内容のものもあって、関連の史実をある程度補完しうるものがある。

孫文が指導した中華革命党は 1916 年に、国内で革命活動を進行させることに方針を転換し、まず上海を活動の本拠地にして、1917 年から 1918 年の間には南下して広州に軍政府を成立させ、護法運動を推進したが、その後は軍閥の妨害を受けて上海に押し戻され、孫文の革命事業は再び低調に陥った。しかし 1920〔大正９〕年 10 月に、南方軍政府に所属していた陳炯明の部隊が広州を占領したことで、国民党の勢力は広東省で盛り返し、孫文は再度広州に南下して、政権樹立を準備し、そこを足場に固めて北伐を進めて、北京軍閥政府に取って代わることで全国を統一することを求めた。孫文の革命事業はこうして再度の転機を迎えることになり、何天炯は孫文の党本部の中核メンバーとして、おのずから広州に同行し、そこでの仕事に参加することになった。何天炯が孫文より日本で同国との外交事務を担当するよう託されたことにより、何は宮崎との文通にこの関連の内容を少なからずしたためたのであって、この時期の宮崎と孫文との対日外交での関係がこれら文中からうかがえるのである。

## 二、孫文政権及び対日外交への関心

陳炯明軍が広州を占領したのち、孫文はただちに上海の本部メンバーを召集して広州に進駐させ、軍政府の復活と内政の展開、それに一連の外交活動についての計画を協議させた。1920 年 11 月 14 日、何天炯は上海より宮崎滔天に書簡を送り、広東での革命の局面と孫文の来粤〔広州および広東省の略称〕計画を述べたのであり、その手紙には「広東での局面は、すでにわが党の範囲に入ってきていて、孫文先生の案では二週間以内に唐（紹儀）・伍（廷芳）両君をともなって来粤して、もとの軍政府を現状のまま維持し、そのあとに逐次改良をしていくことで発展を期す」と記されていた。何天炯はこの情勢を「まさに辛亥革命以来、いまだなかったチャンス」と見なしたのであり、歓喜雀躍の情念が文言にあふれていた。何は引き続き孫文に談判して、自身の日本に渡ってからの活動と孫文の来粤計画の起草とともに、代わって滔天に東京方面の動静を観察させることを要請していた。先の手紙では何は続けて「孫文先生のご意志としましては、帰粤を待ったのちに、組織が端緒についたところで、小生を東〔日本の意〕に遣わすことによって、貴国の朝野人士と、ともに東亜の大局の前途を協議することであります。小生は国家を維持するためには、まず内政があって、そのあとに外交があるものと思いますし、わが党が堅固で公明正大な団体になるならば、世界の外交はみな移ってきましょうから、どうして日本だけ孤立することができましょうか。ゆえに小生は近いうちの帰粤を考えていまして、各方面の具体的な状況を観察し、ある時は救援を、またある時は展開をしたのち、今後の出方を決める所存でして、孫文先生も大いに賛成しておられます。このため小生は一週間後、いったん汕頭に戻ってから、そのまま広州に行くつもりです。東京でのいっさいの具体的情況を、以後先生は随時報告して下さることを強く望んでおりまして、固唾を飲んでお待ちいたしています」と記した。最後に彼は滔天に「ただこのことが事実となる前に、他人には話さないで下さいますようお願いします。さもなければいくたの阻害に遭い、公私両面で利益ないと、先生も前からお考えでいらっしゃるようです」(5)と、この計画はとりあえず秘密にしておくよう念を押した。

何天炯は期日どおりの 1920 年 11 月下旬に広州に南下し、孫文らも 11 月 28 日に到着すると、すぐに護法軍政府の再建に着手し、同時に外交活動を展開し、国際的承認を取るべく〔従来の北京政府と〕争いはじめた。同年 12 月 21 日に何天炯は宮崎に書簡を送り、孫文が自分を日本に派遣して活動するように任せているが、自分自身は困難に感じていることを述べ、「同時に英・独・米がそれぞれ代表を一人ずつ日本に派遣しているが、小生の東行〔先と同様「日本行・訪日」の意。以下そのように訳す〕のことは、だいたい来年の一月中旬まで待ったのちにしていただけることを余儀なくされています。孫さんはこの問題を政府にとってきわめて重大なものと見ているため、小生はこの難局を打開しないわけにはいかず、あなた様方に手助けを心からお願いします」と、宮崎に協力と援助を求めた。1921〔大正 10〕年 1 月 5 日に、何天炯が広州より宮崎滔天に送った書簡では、孫文がたびたび催促しても、自分が日本に行く時期が決められない原因は、その機が熟していないと自ら認識していることにあるとし、ならびに日本政府の情況について意見を求めてもいる。文中には「小生が日本に行く時期は、今もなおまだ確定していませんが、孫文先生は常に小生を早く行かせようとしておられるものの、ただ小生の個人としての愚見では、正直まだすぐに賛同することはいたしかねます。なぜなら昔も今もあまねく外交は、無礼な

態度を見せてはならないからです。小生の愚見としては、最低限にも総統選挙が完了するまで待たなければならず、そのあとでも外交のことは言うに足ります（総統選挙は、一か月後には成功を告げるでしょう）。あなた様の意はうかがっていませんが、いかがでしょうか。東京の情勢はなおも常に知らせて下さいますことを望みます」と記されていた。続く１月 25 日に、何天炯が宮崎に送った書簡では、党内の大多数も早すぎる日本行きは不要であると等しく主張していて、日本政府の軽侮を招かないようにすることが再度説明された。その文中には「孫さんは和田〔外務省の関係者か〕からの二十二日の来電を公式に受け取ってから、速やかに代表を派遣して会談する用意をしているようです。ただし同僚もみなこの度の党再興は、対内・対外の両面で、ひとしく慎重にことを進めるべきと思っています。目下のところ貴国政府は、実際わが党の心情を害していますから、むやみに代表を送ってはならず、さもなければ人々に軽侮の念を抱かせることになると考えています」と書かれていた。何は日中関係の悪化が心配になり、二人が共に執心していた「中日連盟」の理想の実現は困難になったとの憂慮を抱き、日本政府が力に任せて中国を欺こうとしている政策から、事態を好転させるかどうかは甚だ望みが薄いとして、「年来日中両国民の感情は、劣悪の極みにあって、小生はあなた様とともに中日連盟の主張を持っているが、いつの日に実現するのかわからず、思うに憤慨にたえません。ならば時期はすでに刻一刻と来ていて、もし貴国政府が力に頼るようにやっていくのなら、人類の幸福につながるようなことは、きっと望めないでしょう」としたためた。

孫文は広州軍政府を早急に立脚させることで合法的な地位を得て、北方政府に代わる正統政府であるとのイメージを国際間に抱かせることで、国際的な承認と、外国の政治と経済の両面での支持を得ることを早急に求めた。彼には日本政財界と深く厚い関係を持っているとの自信があったことから、日本に非常に大きな希望を抱いていて、そのため何天炯にできるだけ早く日本に渡って活動することを催促した。しかし何天炯ら各人は、早すぎる行動はかえって侮りを招くからよくないと考え、最後は折衷的な方法がとられることになった。孫文と何天炯らとの討議ののち出された提案では、日本政財界に広汎な人脈や関係を持っていた日本人の旧友・宮崎滔天らを広州に招いて、宮崎らに軍政府に代わって日本政財界への期待を伝えてもらい、あわせて日本で活動してもらうようお願いすることがうたわれた。２月６日、孫文は何天炯に宮崎への電報を送らせ、広州への訪問を招請した。８日、何天炯もまた広州より宮崎に書簡を送り、再度孫文の招請を、もう一人の旧友であった萱野長知にも含めて伝えた。その文中には「二月六日に送りました、貴方にお越しいただきたい電報は、受け取られたかどうかはわかりませんが（これは高野［〔筆者注〕孫文の日本名］先生のお気持ちです）、……萱野兄は今ご自宅で悠々自適なのでしょうか。広東に来るお考えがあるとお聞きしていますか。貴方には萱野兄にお願いしてご一緒に広州までお越し下さりたいものです。でしたら皆が喜びますし、とりわけ慶賀の至りです。広州での局面の無事と、発展があることを希望して，ご安心でいられることをお願いします」と記されていた。

この時期より何天炯が連日宮崎に送った書簡の情況からは、宮崎の身が一貫して日本にあって、大海を隔てていたのであっても、何天炯からの集中した連絡を通じて、宮崎が孫文の革命事業の進展をずっと密に注視していたことや、宮崎の広東での政局への理解と、孫文政権の対日関係の動向が看取される。また同時に、孫文が何天炯を広州政府の代表と

して日本に派遣して活動させることが難しくなった情況のもとで、何が孫文らによって革命政府の対日外交での重要な依頼人に選ばれていたこともわかるのである。

### 三、孫文との面会と「民間外交使節」

宮崎は孫文・何天炯からの招請の書簡や電報を続けて受けたことで、ついに萱野長知と話し合いをまとめ、1921 年２月末に中国へ向けて出発することになり、上海経由で香港に着いたあと、３月 12 日に広州に到着した。宮崎がこの道中を記した「広東行」の一文には、先に宮崎らを出迎えた何天炯に、そのまま連れられて孫文と会見した情景が描写されている。それによれば、３月 12 日の早朝６時、船は広州に到着し、何天炯と弟子たちが彼らを迎えに赴いて、案内した亜州大旅館にともに宿をとった。そこで手配された高級客室で、一同が腰を下ろすやいなや、何天炯は宮崎ら二人に「日本での形勢はどうですか」と問いかけ、二人は簡潔に説明した。そのあと、何は宮崎らの質問に対し、待たせずに広東の現状を述べた。宮崎は「生涯われらが信頼している何君が、広東の状況を率直に説明していたさまは、われわれと東京にいた時感じていたものと変わっていなく、各種の報道記事で感動をもたらすことになり、いささかの不安は一掃された」と記している。朝食後、何天炯は宮崎と萱野の二人を帯同して先に軍政府へ行き、孫文に謁見した。宮崎は「応接室でほどなく待ったのち、孫文がやってきて、一同と熱く力強く握手をした。私は握っていた手を上から下まで眺めながら、彼が着ていた詰め襟の洋服を見て、成功するか否かの命運はまさに彼に懸っていると感じた」と記している。その当時、日本の新聞には孫文の「赤化」と親米活動を批判するものもあったが、宮崎らがこのことを孫に尋ねると、孫は「世界は変化しているが、中国国民が中国国民であるのに変わりはない。時代の変化にともない、思想自体は多少の進歩があっても、まさしく実質上は、中国はやはり中国なのだ」「われわれは三民主義の徹底した実行を決心したことから、私は長年われわれが主張してきたこの主義を変える必要があるとは全く考えていない。いわゆる親米などの言葉については、私は自分から多くを説明する必要はないと思っているし、もしこのことに懐疑的な人がいるのなら、私は日本当局の態度を問うべきだと思える」と答えた。孫文の態度に理解を示した宮崎は、日本政府の対中政策を「大隈〔重信〕内閣が提示した二十一か条要求はきわめて無理なものがあり、寺内〔正毅〕内閣の北方援助主義もまったく理不尽です。この施策は商売人のみを利するものであって、〔日本の〕一般国民もきわめて傲慢になりました。一国の〔中国〕国民がこのような侮辱を受ける理由などありません」と批判して、さらに中国の民衆を排日の挑発者に導いた責任は、日本の劣悪な外交と原敬内閣の無能さにこそあると指摘した。宮崎はこの談話の内容と経過を「広東行」と題し、『上海日日新聞』に連載した。この時の孫文との数年の月日を隔てた会見には、宮崎は感慨を覚え、「別れてから日はたち疎遠になり、久しく会うことがなかったことで、知己を疑い考えこんだりしたが、これは凡人の浅はかな思いであった。世の中は常に情でもつものであり、今や百聞は一見にしかず、広州に着いた日に、いっさいのことは納得する形で氷解した」と記している[(6)]。この孫文との面会と会話によって、宮崎らは孫文が三民主義の理念をこれまで通り堅持しつづけていることを理解し、宮崎が広州に来る前に心中に抱いていた、いささかの疑念は解消された。

二日目の３月 13 日、何天炯は宮崎をともない、二人で黄花崗の七十二烈士の墓への参拝と国民党本部などへの訪問をして、晩に広東軍政府招待の宴会の席にいた孫文の所まで赴き、そこでの同席者には張継・孫洪伊・胡漢民・汪兆銘・馬君武・廖仲愷らもいた。席上で宮崎と萱野が翌日に帰国することを伝えると、孫は「早くお帰りになって、あなた方が見聞きしたことを日本の友人たちにお伝え下さい！」と言った[7]。明らかにこれは、宮崎らが広州政府の「民間外交使節」となって、日本で代わりに活動することを要請するものであった。翌 14 日に何天炯は、宮崎と二人で軍政府まで孫文に〔宮崎にとっての〕別れの挨拶をしに行ってきたのち、萱野ともども一緒に広州から香港まで乗船し、そこから宮崎と萱野の両名はさらに乗船して、上海経由で日本に帰国した[8]。

宮崎と萱野の二人が去った数日後の３月 20 日に、何天炯は広州から宮崎に手紙を送り、宮崎・萱野に対して日本が広州政府に協力することを斡旋するよう希望した。その手紙には「あなた様方にはこの行き来で慌しいさなか、日中両国の人士は誤解を多くしていますが、そのことは甚だ驚愕するにはいられないものがあり、まことに一笑するに忍びません。……東亜の風雲はまさに急を告げていまして、ここでわが党が活動できるかどうかの正念場に、両先生のお力を全面的にお借りしたく、吉報をお待ちしています」と書かれていた。３月 30 日、宮崎は東京に戻り、同日刊行の『神戸新聞』に掲載された談話「最近の広東の情況」で、概ね「香港・広州は従来排日運動の中心地とされていたとしても、現在はすでに排日の声を耳にすることはなく、しかも非常に親日的な傾向が現出してきているのであって、これは今回の旅行中最も愉快に感じたことである。現内閣の不干渉主義という美名の対華外交は、実際は少しも積極的な政策ではなく、無関心な主義である。しかしまさにこのような主義はある種の、人を喜ばすような現象をも引き起こしている。ここから出される結論は、対中外交政策をいま一歩確定し、誠意をもって対処さえすれば、日中親善というようなことは、実際たやすく実現するものである。このことから、一目瞭然で見つけさせられる事実がまだある。それは、寺内内閣の段〔祺瑞への〕援助の政策は、大隈内閣時代の二十一か条要求事件のような拙劣な外交であり、実際に両国間の外交関係を損なっているということである」と述べた[9]。こう見てみると、宮崎への孫文の説諭と期待は、確かに一定の効果を生み出していたようである。

宮崎らが去ってからも、何天炯は数日に一度は、宮崎に近辺の情況を手紙で報告したのであり、その主な論調は、政務の面では総体的に好転しはじめ、孫文の地位は安定してきて、事業は日に日に発展してきていたことから、宮崎らに外交面での助力を講じてもらうよう希望し、日本に政策を変えて広州政府との関係を深めさせることを促すとともに、日本政府の対中動向を問い尋ねるというものであった。４月９日、何天炯は広州から宮崎滔天に手紙を送り、孫文が臨時大総統に当選し、各地の勢力をしだいに平定しているといった、広東での革命の形勢を知らせて、「本月七日、孫文氏は国会によって正式に総統に選ばれ、さっそくその報道をご覧になって大いにお喜びになったことでしょう。この間に各界の人心は、完全に一致しました。……ひとえにわが党の前途はことに遼遠であり、少しばかりのお助けも、皆様方からの大きな希望となります。東亜の問題は、一方にのみ責任があるのではありません。この間の情勢はご存じの通りで、こちらから特にご通知申し上げなくても、あなたが見聞きされたことは、一つ二つお知らせ下さいますようお願いいたします」と、宮崎に多大な協力を希望した。４月 13 日の日本の『大阪毎日新聞』には、孫

文がすでに何天炯を駐日代表に内定させたとの記事が掲載された[10]。５月５日、孫文は広州で正式に中華民国臨時大総統に就任して、対外宣言を発表し、北京政府を非合法であると布告し、各国に広州政府を承認することをアピールした。宮崎は日本に帰ってきたのち、日本政府に向けての外交・社会世論の方面で活動を続け、孫文ら広州政権のために遊説し、これら情況を何天炯に書簡で報告した。何天炯はそれら書簡を孫文に差し出して見ていただくことで、双方の音信の橋渡しとなった。

６月から７月の間、日本の汽船「小川丸」が武器を桂〔広西省の略称〕系軍閥に援助していたことが発覚し、それに気づかされた中国側では、広州の各界で抗議と日本製品ボイコットの運動が巻き起こり、孫文の日本への見方は悲観的なものへと変わっていき、対日関係の構築を求める活動も鈍くなりはじめた。７月８日、何天炯は宮崎滔天に書簡を送り、孫文の宮崎への感謝と日本への外交姿勢の変化を伝達した。そこには「あなたからの各書簡は、小生からみな孫先生にお伝えしまして、あなたの熱意と偉大な願望はまさしく、厳寒の〔逆境での〕友といえるものであり、その人格はとりわけ壮健で比類のないものです。これらのまごころを受けているわが党は感激やまないものです。ただこの間小川丸事件が発生して以来、貴国の外交に先生は、甚だ悲観的になっておられます。孫先生は東亜の大局に対して偉大な計画を持っておられましても、日本との外交での助けは求めず、ただ我々の害にならないようにいけば、大いに成功であると望んでおられるようです。これらのように、わが民党にとって状況は非常に遺憾なことばかりです。あなたも注意して下さい」とあり、自らのことについても、「日本行きも二、三か月以内は実現できそうもなく、小生もうまくいくかとても心配です」と知らせていた。７月 19 日、何天炯は再度宮崎滔天に書簡を送り、宮崎からの来信をすでに孫文に転送して読んでもらったとして、読後孫文が示した中日関係への見方と期待と、自らの孫文への新たな認識を知らせたものであった。その書簡には「ただ今小生があなた様の書簡を持っていき孫先生にお見せいたしまして、孫先生はそれをご覧になって、たいへん喜ばれ、小生に『そちの日本行きのことは、早期の実現を希望しない日はないが、ここでは正式な政府の成立、そちは代表政府の名義で行き、丁重な姿勢で臨みさえすればよい。このように、そちの務めは、もとより事業でも、ましてや借款でもなく、新政府の公明正大なる主旨を、日本朝野の上下に宣伝し、今後貴国政府が東洋で侵略や合弁（請負）をする野心を持ってはならないということを言って聞かせることである。あくまでも単独でこの野心を進めようとするならば、以前からの二十一か条のような不当な強要を、即座にすべて取り消すべきである。このように、彼我両国は、今後は経済の提携をして、種々の親善を結ぶべきなのである。もし実務上で些細な問題が生じても、もとより政府がわざわざ代表を派遣してあたる必要はない。それに日本がもし侵略政策を改めなければ、些細な事業であっても、成功は容易ではない。あるいは当初は進めることができても、その後また必ず困難な日があろうが、そうなれば目下の状況を議論することであり、またもし政府が軽率に日本と特別な関係（すなわち経済と借款）を結べば、必ずや人民から攻撃を受けようし、死刑まで宣告されるかもしれない。段祺瑞が力ずくで、同胞を殺すことで敵に借款を乞おうとしてのたれ死んだことを思うに、このようなことは戒めにするほかない』とおっしゃいました」と記されており、続けて孫文が自らを日本に行かせることを考えているも財政が苦しいことに触れ「孫さんがまたおっしゃるには『そちがすぐに日本へ行ってこの東亜共存主義を宣伝するのは、よいだろう。し

かし今回の行動は、安易すぎてはならないものであり、随員・書記も２、３人同行させて、朝野の各人士と酒を酌み交わすべきである。このように、活動資金も少ないものではなくなってしまうが。……そちは少なくとも一万元は持って、出発してほしい。目下総統府の財政はすこぶる困窮していて、いかんともしがたいが』ということで、さらに『そちは外部の友人や商人に金銭の貸借ができる者はいるか。もしいるなら、政府の名義を出したり担保したりしてもよいが』とおっしゃいましたが、小生は『とんでもないです。小生は孫文先生のお言葉を聞くと、三種の感触を覚えます。一つには先生のお言葉への心からの敬服。二つには先生のお気遣いへの心からの同感。三つには今の人物が公を借りて私事にして、公費が公のものとして使われていないことへの心からの痛恨。先生ご自身もきっとこの感慨がおありのことと存じ上げます』と返事しました」と述べた。

同日、何天炯は再度宮崎滔天に書簡を送り、自らの訪日がなかなか決まらないことからのいっそうの苦衷について「広西問題が解決してから、私が日本に行く件ですが、なおもいくたの躊躇する所があります。おそらく孫先生は内心は急いでおられても、要人多数の意見をお聞きになり、今はまだその時機でないとお認めになられたのでしょう。いたずらに無益なことや、ましてや国民（小国のです）に誤解を招いたりすることのないようにせねばなりません。小川丸事件の発生により、人々の心の悲憤は頂点に達しているようです。どうかあなた方に挽回の方法をお考え下さいますようお願いいたします」と述べたが[11]、これはまさしく全国的な反日の高まりに対しては、孫文政権が対日関係で世論との心情的な矛盾を見せるのをはばからねばならなくなったという事態を反映していた。９月 15 日に、何天炯が宮崎に送った書簡には、広州政府の日本との外交関係の障害について「本政府が日一日と強固に発展してきているといっても、日本との外交の面では、甚だ冷淡なものとなりましたが、だまされてきた結果、いかに外交能力がすぐれた者であっても、こうした鴻溝〔深い溝を意味する故事成語〕の疎通はできなくなってしまうのではと恐れています」と心中を吐露した。９月 28 日に、何天炯がまた宮崎に送った書簡には、広州政府への米国の態度と自らが訪日できると考えられる時期について「近来米国のほうは、当政府に対して礼儀正しい姿勢が多く見られますが、もしわれわれが兵力を武漢にまで及ぼせたのなら、先に新政府を承認するのは、きっと貴国になるはずです。小生の訪日の期日は未定のままですが、局面は日に日に展開していまして、出発の時期はそう遠くはないでしょう」と述べている。

上記のことからわかることは、孫文の広州政府がこの一時期にとった対日外交は、さまざまな要因をはらんでいたということである。一方では孫文らは政権の困難な状況のなか、日本の各政財界の支持をうけることを切実に望み、とりわけ孫文本人がこのことに非常に大きな希望をいだいていたが、何天炯らのように日本政府の対中政策に比較的理解を示した人がいたとしても、それはまた比較的悲観すべきものになったのであり、そのため何天炯は、孫文がしばしば日本で活動することを催促したのに対しては一貫して同意に至れず、遅々として訪日には至らなかった。また一方では、日本の対中侵略政策は中国民衆の反発を引き起こし、反日の熱を沸き起こさせた。それは孫文に対し、日本を支持していくことを牽制する要求にもなったのである。孫文の広州政府の対日外交はこのようにずっと移ろい矛盾した状態にあったが、孫らは宮崎・萱野に広州訪問を招請することを通じて、彼らを広州政府の日本人民間使節とさせて、日本に帰国してから代わって宣伝や活動を行なわ

せ、日本政府の対中政策に影響を及ぼそうとした。しかし事実が物語ったことは、宮崎・萱野は職も権限もない民間人と見なされたのであり、彼らが志しを持って孫文の革命に協力や援助をし、宮崎のように新聞紙上で日本政府の対中政策を批判して、日本の社会や世論にそれ相当の影響を与えたりはしたものの、直接日本政府に対して対中外交政策を変えさせるほどの、実際の効果は難しかったということであった。孫文らが宮崎らに与えた、これらの面での希望は高すぎたことは明らかであった。さりながら日本政府の対中政策への宮崎滔天の批判は、当時の日本の朝野全体が中国への侵略・蔑視の喧々囂々(けんけんごうごう)たる声に覆われていた中で、この中国侵略政策反対の一声は、東アジアの平和維持のための孤独ながらも清らかな高音となったのである。

## 四、結　語

宮崎が広州を訪問した1年後の 1922〔大正 11〕年6月、陳炯明が今度は大総統府を砲撃して、孫文は逃げ出す目に陥るという事件が起こり、孫文の革命事業はまたも一大挫折を受けることになった。何天炯も孫文の側近であったがゆえに、家族を連れて広州を離れ故郷に避難せざるをえなくなることになり、故郷に帰っての避難生活は、1年半にも及んだ。その間郵便制度の不備により、宮崎滔天と 10 年近くの長きにわたって続けていた連絡のやり取りもここで途絶えることになった。1923 年、故郷にいた何天炯は読んでいた新聞から、宮崎滔天がすでに 22 年の冬に世を去っていたことを知り、当時記していた『山居一年半』の中で[12]、この知らせを聞いたことへの情景や感慨について「一日に読んだ上海の新聞に、宮崎滔天さんの追悼会を知らせる一節が載っていて、私はまだ半分も読んでいないうちに、あっ気に取られてしまい、青天のへきれきのような、彼を失ったとの思いに常にとらわれるに至った。ただただ悲しい」と打ち明けて、文中で宮崎滔天の生涯と中国の革命事業への貢献を述べ、宮崎を「功はわが中華にあって、民国の成立を助けた」「わが党を愛した心は、まさに至れり尽くせりであった。その的確で素早い行動は、恐れおののくほどであったが、現在の生活になって自由をすべて失ったからこそ、私は心より感慨を覚えるばかりである」と称賛している。これは宮崎滔天と革命同志として、国境を越えた知己と終生の親友となった何天炯の、日本当局の圧制を恐れずに一生をかけて中国革命を誠心誠意支持し、「連華興亜」の理想のために力を尽くした、堅い志しと高潔な人格を持った宮崎への、衷心からの敬服であった。

本稿での考察から見えてきたことは、宮崎滔天は 1920 年から 1922 年の間、孫文の広東政権に対日外交面で援助を与え、孫文政権の日本との「民間外交使節」として力を尽し、孫文の革命事業への支持については、命を終えるまで貫き通した。この終生の志しは「連華興亜」の理想を持った日本志士の鑑であり、辛亥革命後に日本の朝野で対中侵略の傾向が日ましに強くなった全体的環境のなかで、宮崎はなおも自らの理想を堅守し追求して、孫文と理想をともにして形成された、国境を越えた友誼を生涯続けていった。宮崎滔天は孫文の革命事業に終生参加した一人であり、孫文の革命を理想とした一人の日本人同志でもあったと言える。宮崎滔天と孫文や何天炯ら各人は、共同の理想によって共同で東アジアの共存と事業の振興に力を傾倒し、国境を越えた終生の友誼を作り上げていったことで、中日両国の近代交流史上に輝かしい一ページを残すことにもなった。

同時にこうした史実は、この時期の広州政権で孫文は当初日本に支持を求めることに過度の期待を抱いたものの、何天炯ら政府内の中心メンバーから賛同を得られなかったということをも示している。日本政府が軍閥への支持や、中国での利益をだまし取るような侵華政策を続けたことは、中国全土に反日の波を引き起こすことになり、孫文は宮崎らによる「民間外交」の進行を通じ、日本政府に対中政策を変えさせるべく影響をもたらすことを望んだが、効果は微々たるものに終わったのであって、日本政府への期待に満ちていた孫はしだいに冷淡さや失望を見せるようにもなり、ソ連や米国などに近づくようにと変わっていったのである。

---

(1) これら資料をともに提供してくださった宮崎滔天・何天炯両人の子孫ならびに、これら作業に支援・援助を下さった久保田文次教授に対し、謹んで感謝申し上げる。
(2) これらの資料はなおも未公開であるが、何天炯と孫文との関係を内容に含む楊天石・狭間直樹「何天炯与孫中山—宮崎滔天家蔵書札研究」(『歴史研究』1987 年第 5 期）が以前一文を引用していたほかは、利用例は見られない。
(3) 李長莉「何天炯与東京同盟会本部」(『近代史研究』2012 年第 3 期）参照。
(4) 楊天石・狭間直樹「何天炯与孫中山—宮崎滔天家蔵書札研究」(『歴史研究』1987 年第 5 期）参照。
(5)「何天炯の宮崎滔天への書簡」は宮崎滔天家蔵。以下引用する何天炯より宮崎滔天への書簡はすべて、この注と同じものであることから、重ねての注記はしないことにする。
(6)「広東行」、宮崎龍介・小野川秀美『宮崎滔天全集』第一巻（平凡社 1971 年版）572、587-588、624 頁。俞辛焞『孫中山与日本関係研究』（人民出版社 1996 年版）245 頁。
(7)「宮崎滔天年譜稿」、段云章『孫文与日本史事編年』増訂版（広東人民出版社 2011 年版）624 頁。
(8)「広東行」、宮崎龍介・小野川秀美『宮崎滔天全集』第一巻。
(9)「宮崎滔天年譜稿」、段云章『孫文与日本史事編年』増訂版、624-625 頁、参照。
(10) 段云章『孫文与日本史事編年』増訂版、625 頁、参照。
(11) 萱野長知『中華民国革命秘笈』（挿図部分「何天炯致宮崎滔天函」)、帝国地方行政学会発行、1940 年版。
(12)「山居一年半」、『建国』所載（広州)、1928 年。